

腸管癒着症特に術后腸管癒着症を中心として

岡山大学温泉研究所 外科

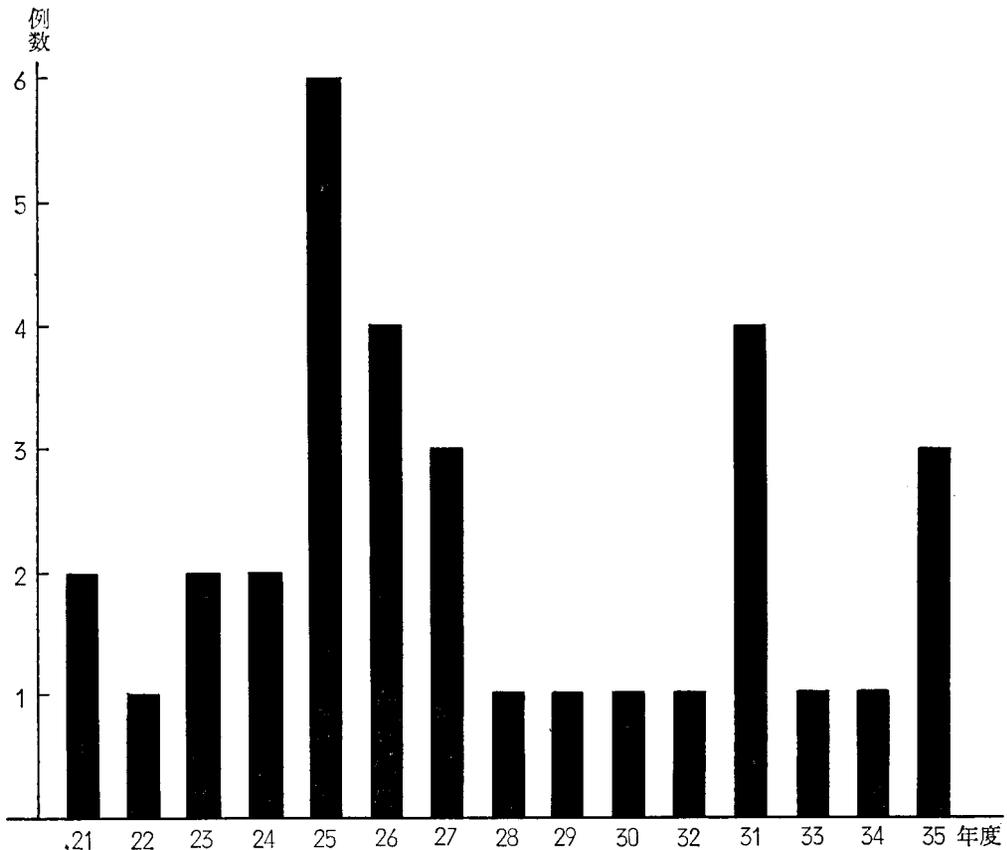
大 谷 満

I. 結 言

近年，外科領域に於ける進歩は著しく，化学療法，輸血，輸液，麻酔，手術手技，等々その何れを見ても隔世の感がある。このような日進月歩の外科領域にあって，現在尚大きく取り残されたものゝ一つに，腸管癒着症の諸問題が挙げられる。私達が癒着をテーマとして取扱うとき，胸膜等の癒着よりも，まず腹腔内のそれを考えるように，腸管癒着症は

外科医にとって非常にポピュラーな問題であり，各分野に於て多数の研究業績が発表されているにも拘らず，依然として未解決な問題であり，これからの医学に課せられた大きな宿題と云えよう。上述の如く医学領域各分野の進歩は，開腹術を容易なものとし，その例数は年々増加し，直接，間接に腹膜を損傷或いは刺戟する度が多くなったためか，開腹術による直接の死亡率は著しく低下したにも

図 1. 年 度 別 発 生 頻 度



拘らず、癒着症状を訴える患者の数は一般に増加する傾向がある。換言すれば、開腹術と腸管癒着症とは不則不離の関係にあると云える。私はこのような癒着が如何にして発生するか、その機序を解明せんがため目下動物実験により検索中であり、追って発表の予定であるが、こゝでは当科で取扱った癒着症36例につき、臨床的観察を行い諸家の報告と比較検討してみたい。

Ⅱ. 臨床的観察

1. 症例の分類

a. 急性症

臨床的にイレウス様症状を呈し、急性イレウスと診断されたもの。

b. 慢性症

術后腸狭窄症々状、又は慢性腸閉塞症々状を呈したものに分けて見ると、急性症群26例に対して慢性症群10例となり、急性症が全体の72.2%を占めている。

2. 年度別患者数

上述の如く開腹術の例数が年々増加し、腹膜の損傷、或いは刺戟の機会が多くなり、癒着症例もこれと併行して増加することが予想される。そこで36例を各年度別に分けてみると、図1の如く年を追って増加する傾向はみられず、昭和25年から27年の間に比較的多く13例を数え、全体の36.1%を占めている。早坂、斉藤、脇坂らは、近年、殊に昭和28年以后逐年的に癒着症例数が増加しつつあると報告しており、この点私達の症例では、これら諸家の報告と一致しない。これは当岡山大学温泉研究所の特殊な立地条件その他の理由で症例数が少ないため、一定の傾向を示さなかったものと

考えられる。

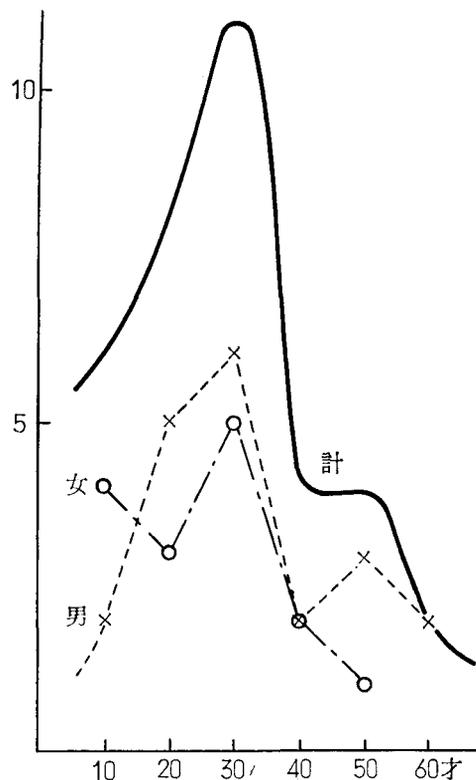
3. 性、及び年齢

次に36例を性、及び年齢別に分けると、図2の如く、男子21例、女子15例でやゝ男子に多く、20才～40才が全体の52.8%を占めており、青壮年期に多いことがわかる。

4. 初回行われた手術疾患

次に初回行われた手術が癒着の原因になったと思われるものを、疾患別に分けると、表1の如く虫垂炎が原因になったものは、約64%で第一位を占め、次いで胃、十二指腸疾患の14%、婦人科疾患5.7%、その他16.8%となっている。これは最近の虫垂切除例数の増加と考え併せて注目される。この表では婦人科疾患が原因と思われるものは5.7

図 2. 性、年齢



%に過ぎないが、これは外科の立場からみた結果であり、その背後にはかなり多数の癒着症例があるものと想像される。従って婦人科疾患の意義も大きいと考えられる。

5. 急性症及び慢性症の各原因疾患

次に急性症及び慢性症の各々について、その原因になったと考えられる疾患別に分けてみると、表2の如く急性症、即ち急性イレウス様症状を訴えたもの、原因疾患は、虫垂切除例が約62%で第一位を占め、次いで胃切除

例の15.4%、以下腸腹膜疾患手術、その他の順となっている。慢性症、即ち術后腸管狭窄症々状、又は慢性腸閉塞症々状を訴えたもの、原因疾患としては、同じく虫垂切除例が70%で第一位を占めており、こゝでも虫垂切除の意義は大きいことがわかる。因に諸家の報告をみると、急性症の原因疾患としての虫垂炎は田北35.2%、斉藤39.2%、としており、虫垂炎が慢性症の原因疾患となる割合は、斉藤38.9%、早坂70%としている。

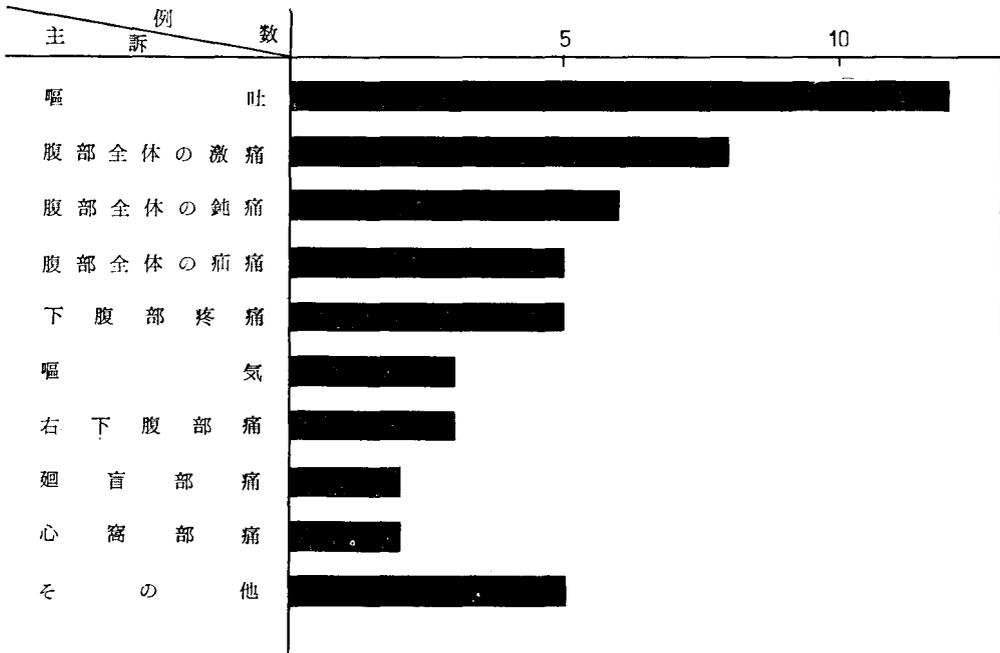
表 1. 初回行われた手術疾患

原因疾患名	症例数	%
虫垂炎	23	63.6
婦人科疾患	2	5.7
胃十二指腸疾患	5	13.6
メツケル憩室炎	1	2.8
S状部ポリポージス	1	2.8
胆のう炎	1	2.8
原因不明	2	5.7
その他	1	2.8

表 2. 急性症、慢性症の原因疾患

	急性症	慢性症
虫垂手術	16例 61.5%	7例 70%
胃手術	4" 15.4%	1"
婦人科手術	1"	1"
胆道系手術	0"	1"
腸、腹膜手術	2"	0"
不明	2"	0"
その他	1"	0"
計	26例	10例

図 3. 主訴の分類



6. 自覚症状

次に来院時の訴えについて分けてみると、図3の如く嘔吐を訴えるもの12件、23%で第一位を占め、腹部全体の激痛8件でこれに次ぎ、以下悪心、下腹部膨満等のイレウス症状の順である。脇坂らは腹部の鈍痛を訴えるものが多く42%を占め、次いで激痛26%、疝痛18%の順であったと報告し、これは再開腹を受けたものの中に、急性イレウスと診断されたものが多いためであろう、としている。早坂は虫垂切除后癒着障碍465例についてその主訴を分類した結果、腹部或いは腰部に疼痛を訴えるものが多く、特に右下腹部痛が52%にみられ、一般に食后或いは運動時に増強する、と述べている。私達の症例でも上述の如く嘔吐を訴えるものが多いが、これは対称に急性症が多いためと考えられる。

7. 癒着部位

次に癒着形成に関与する部位を、最終回開腹時所見より検討すると、大網、小腸、腹壁腹膜縫合部間の何れかの部位の癒着を認めるものが全症例の63.8%であった。但し次の項で述べる如く、最終回開腹術を行っていないものが8例あり、これを開腹したものと考えれば、実体は更にこれを上廻る値を示すものと予想される。諸家の報告にもみられるように、一般に大網と小腸が癒着に関与する場合が多く、早坂は虫垂切除后癒着症の50%は大網と腹壁腹膜縫合部との間に癒着を認め、脇坂は、再開腹例の第一次疾患では虫垂切除后の腸管癒着が45%を占めており、開腹時の検討により回盲部と腹膜の癒着が最も多く26%を占め、回盲部と大網の癒着が19%でこれに次ぐ、と述べている。又田北は腹壁癒着部の

癒着は全癒着症例の44.69%であると述べている。

8. 私達の行つた治療方法

次に治療方法についてみると、表3の如く癒着剝離術が36.9%で第一位を占め、腸吻合が23.8%でこれに次ぐ。“その他”の内には、最終回開腹術を行わず、絶食療法或いは胃内容吸引により、一時的に症状の改善をみたものや、手術時期を失って死亡した例が含まれている。

表 3. 治療方法

治療方法	例数	%
癒着剝離	17	36.9
腸吻合	11	23.8
索状物切断	1	2.2
腸切除	3	6.5
人工肛門造設	1	2.2
鉍泥纏絡	4	8.7
その他の	9	20.0

脇坂によると、癒着剝離術が71.2%でその大部分を占め、索状物切断が10.5%でこれに次ぐ、と述べている。私達の症例では、特に最近の4例に Nobleの嚙矢になる Plication法を改良した Childの変法、即ち私達の所謂“串刺し法”を応用したものが含まれている。

Ⅱ. 結 語

私は岡山大学温泉研究所外科で取扱った36例の腸管癒着症につき、臨床的に2, 3の事項を検討して、その結果を報告した。

1. 私達の取扱った症例では、諸家の報告にみられる如き、逐年的增加の傾向は認めなかった。これは当研究所が特殊な立地条件にあり、症例数が少ないためと考えられた。

2. 男女比は21対15でやゝ男子に多く、年齢別では20~40才が多く、青壮年期に発生頻度が高いことがわかった。

3. 癒着の原因となった初回手術疾患は、虫垂炎が全体の64%を占めるが、胃、十二指腸疾患、婦人科疾患が癒着の原因となる頻度も可なり高い。

4. 急性症及び慢性症の各々の原因疾患は、両群共に虫垂炎の占める率が高く各々62%及び70%であった。

5. 来院時主訴は嘔吐、腹部全体の疼痛が多い、これは対称群に急性イレウス例が多いためと考えられた。

6. 癒着部位は、大腸、小腸、腹壁腹膜縫合部間の何れかの部位で形成されるものが多く、63.8%であった。

7. 最終回行った治療法は、癒着剝離術が63.9%で最も多い。腸吻合術で愁訴を改善したものもあるが、原則として癒着防止剤は使用しなかった。

癒着防止剤に関しては古くから数多の業績が報告されているが、決定的な解決方法は未だ得られていない。腹腔内手術操作に伴うこのような腸管癒着は洵にわずらわしく、殊に広汎性癒着症、或いは習慣性腸閉塞症の対策に日夜私達は悩まされていると云っても決して過言ではない。私達は36例中、最近の4例の広汎性癒着症に対して、イレウスの再発を防止する目的で Noble の嚙矢になる Plication 法を改良した Child らの変法を応用して、その愁訴の大半を改善し得た。本法の詳細については追って発表の予定である。

文 献

1. 早坂 澁: 外科治療, 2, 90, 1960.
2. 斉藤 溟: 外科, 22, 87, 1960.
3. 脇坂順一: 久留米医学会誌, 22, 2578, 1960.
4. 田北周平: 第15回日本医学総会学術集合記録, 202~209, 1959.
5. Noble. T. B: Am. J. Surg. 35, 41, 1937.
6. Child. W. A: Phillips R. B. Ann. Surg. 152, 258, 1960.
7. 柴田英生: 日外会誌, 59, 499, 1958.

A STATISTICAL AND CLINICAL STUDY OF
POSTOPERATIVE INTESTINAL ADHESIONS.

by

Mitsuru OHTANI, M. D.

Institute For Thermal Spring Research
Okayama University, Misasa, Tottori-Ken, Japan

The author studied 36 cases of postoperative intestinal adhesions treated in this insitute during the past ten years. The results obtained were as follow.

- 1) The sex ratio was 21 (male) to 15 (female).
- 2) Fifty-three percent of the cases ranged from 20 to 40 years in age.
- 3) The initial operations which supposedly caused the adhesions were appendectomies.
- 4) Of the primary causative disease of the acute intetinal obstruction group, appendicitis accounted for 62 % and gastrointestinal diseases for 15.4 %.

The primary causative disease of the chronic intestinal obstruction group was found to be appendicitis in about 70 % of the cases.

- 5) The chief complaints made by patients were of vomiting and generalized severe pain of the abdomen.
 - 6) The most frequent sites of occurrence of the adhesions were the greater omentum, the small intestine and the sutured part of the peritoneum.
 - 7) As regards the final therapeutic approach, in the largest number of cases (36. % of the total) lysis of the adhesion was performed. In most other cases, however, distress was relieved by enterostomy, resection of the bowel, and so on. Finally, the four most recent cases, all of whom suffered from recurrent intestinal obstruction, were relieved of the major portion of their abdominal complaints by a new method, an improvement of the original technique advocated by Noble in 1937. The details of this new technique will be reported in the next issue.
-